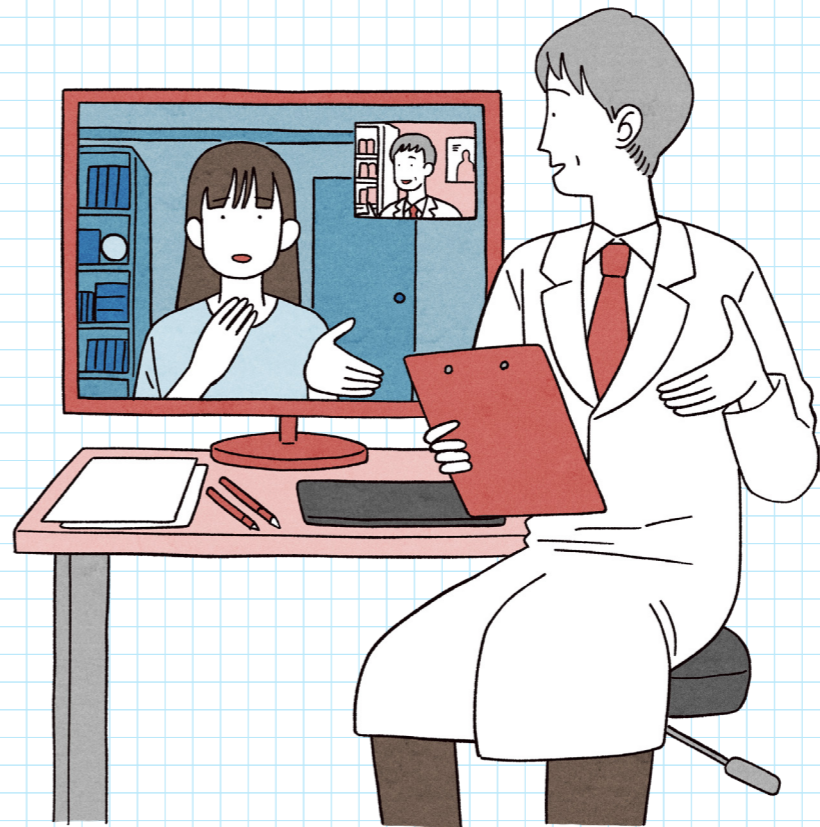


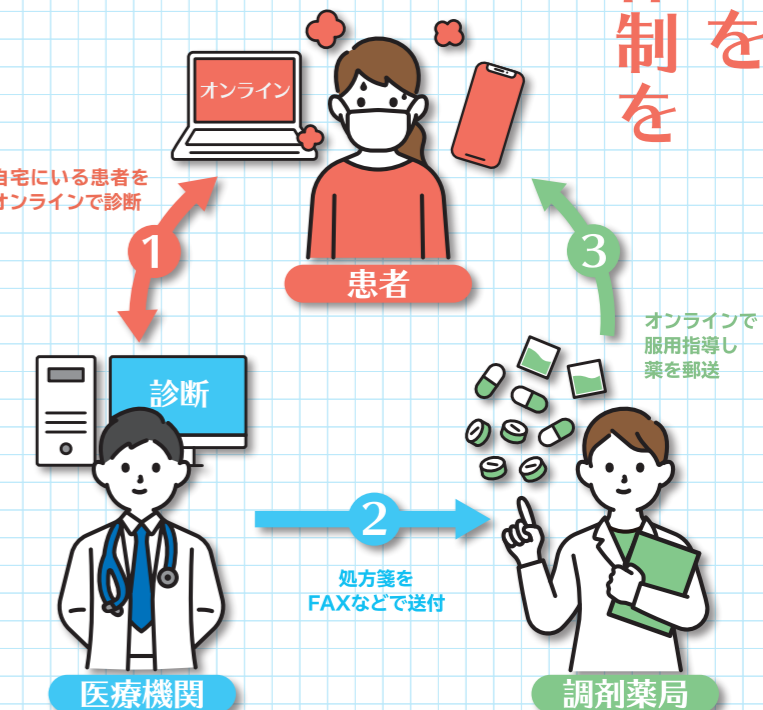
# オンラインの活用が

# これからの

# 医療を変える！



## 患者の負担を減らし 安心して医療を 受けられる体制を



岩手では、本州一県土が広いことに加え、慢性的な医師不足や専門医が大きな病院に集中していることもあり、遠方から通院する患者の負担は小さくありません。また、高齢者の増加に伴い在宅医療や訪問診療が必要なケースも増えており、限られた人員で全ての地域に医療を提供していくには、さまざまな課題があります。

こうした状況の中、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機に、県内でもスマートフォンやタブレット端末などを通じて診察ができる「オンライン診療」の活用が広がっています。これによって感染のリスクが避けられるだけでなく、患者は自宅にいながら医師の診察が受けられるなど、大きなメリットが生まれています。

県は、2023年から県立病院でもオンライン診療を始めていくほか、新たに「遠隔医療設備整備費補助金」を創設し、オンライン診療に取り組み医療機関への支援をスタート。デジタル技術も積極的に活用しながら、皆さんが住み慣れた地域で安心して医療を受けられる体制を整えていきます。

**新型コロナウイルス感染症の相談窓口はこちら**

かかりつけ医がない場合や、相談する医療機関に悩む場合

**いわて健康フォローアップセンター**

電話 0570-089-005  
FAX 050-3730-7658

受付時間：24時間受付  
(土日・祝日含む) 県ホームページ▶

オンライン診療の例

### ◎岩手医科大学附属病院の取り組み

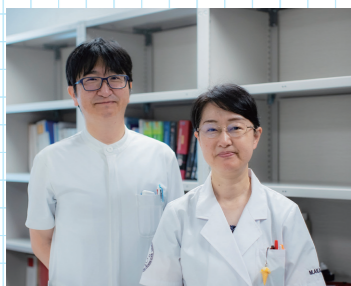
## 診療と面会にオンラインを活用し、 感染リスクから患者と家族を守る



岩手医科大学附属病院では、小児科の専門医による高度で専門的な医療を受けることができます。一方、遠方に暮らしながら定期的な診療が欠かせない子どもとその家族は大変な思いをしながら通院していました。そこで、県と岩手医科大学附属病院が連携し、2021年4月からオンライン診療のシステムを導入。通院の負担軽減に加え、コロナの感染拡大時には感染リスクから患者と家族を守ることもつながりました。

「片道2時間以上もかけて通院される方もいましたので、とても楽になりましたという声をいただきました。ただ、対面での視診や触診も重要なので、オンラインと組み合わせながら患者さまに合った診療を行うことが大切です」と、小児科の赤坂真奈美教授は話します。さらに、同年6

オンライン面会は、1家族5〜10分程度。家族のスマートフォンと病院のPCをつなぎ、ウェブカメラで赤ちゃんを映す仕組みで、多くの家族が利用しています。(写真提供：岩手医科大学附属病院小児科)



岩手医科大学附属病院・小児科の赤坂真奈美教授(右)と外館玄一朗特任准教授(左)

月からは、この機能を活用して、NICU(新生児集中治療管理室)に入院している赤ちゃんや家族とのオンライン面会もスタート。看護師がその日の様子などを説明し、家族は画面越しに赤ちゃんの様子を見守ることができました。「新生児の場合、母子関係の確立や愛着形成がとても大切なのですが、コロナ禍で赤ちゃんに会えない状況が続いていました。オンライン面会を始めたことにより、両親だけでなく、兄弟や祖父母も参加でき、喜んでもらっています」と話すのは、外館玄一朗特任准教授。患者側と病院側の負担を減らすだけでなく、新たな活用の形を広げるオンライン診療・面会。小児科の取り組みをきっかけに、他の診療科でも導入の動きが広がっています。

### ◎北上市の取り組み

## モバイルクリニックの導入で 医療機関のない地域をカバー

北上市では、診療所のない地域に、医療機器を載せた車両で看護師が訪問し、病院にいる医師がテレビ会議システムを用いてオンライン診療を行う「モバイルクリニック」という取り組みが始まっています。

市内16地区のうち病院・診療所がない8地区

医療機関が偏在する地域において、診療の「新たな選択肢」として注目されるモバイルクリニック。北上市では、広く周知を行いながら、2024年1月からの本格運用を目指し、準備を進めています。



患者の暮らす地域に移動し、オンラインで診療を行うモバイルクリニックの様子。